

Chinese stoneware bowls used as mortar vessels for kitchen utensils in Medieval Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1590

中世日本で擂鉢として使われた中国産の鉢

Chinese stoneware bowls used as mortar vessels for kitchen utensils in Medieval Japan

荻野 繁春

In medieval Japan, there are two types of stoneware bowls imported from China, which were used as mortar vessels for kitchen utensils. The most striking thing about these stoneware mortars is wearing smooth insides of body. Type I has no scratched comb lines on its inside surface. Type II has scratched comb lines on its inside surface. On the basis of rim profile I classified type I to 11 sub-types, and type II to 6 sub-types, but it is not always easy to distinguish these stoneware mortars in detail.

I have confirmed 210 rim sherds at 72 sites so far, 172 of these rim sherds are type I which constitute some 80% of all rim sherds (210). A large number of sherds are very fine-textured brownish sherds with whitish grit, for this reason, Chinese stoneware mortars may be products of kilns around parts of the lower Yangtze-Kiang 長江(揚子江) in China. Chinese stoneware mortars are grouped into unglazed stoneware mortars and glazed stoneware mortars. The bulk of type I constitute of unglazed stoneware mortars and the bulk of type II constitute of glazed stoneware mortars. It is that a characteristic feature of type II has scratched comb lines on inside surface of body, the number of comb lines are six or eight, thirteen, fourteen.

Chinese stoneware mortars are generally be used during the 12th and 13th century, particularly in the latter half of 12th century. A number of Chinese stoneware mortars were found at various sites of Hakata city and at Dazaifu site in Chikuzen Province, and I have found 142 rim sherds at 30 sites in Hakata city. In Chikuzen Province, there are a number of Toban ware mortars (in Harima Province) besides Chinese stoneware mortars. Particularly at various sites of Hakata city, there are a number of Chinese stoneware mortars.

There are no evidence of production sites of type I in China for the present, while there are some evidence of production sites of stoneware mortar with scratched comb lines on its inside surface in China. Japanese people in the Medieval Ages found newly utilitarian for kitchen use of type I. Chinese stoneware mortars did not trade covering a wide range in Japan, but type II had much influence upon Japanese stoneware mortars, particularly Bizen ware mortars, so the quality of Bizen ware mortars as commodities might improve in comparison with the other mortars, for example Toban ware mortars and Tokoname ware mortars (in Owari Province). Chinese stoneware mortars were a very important influence upon forming the Japanese Mortar Culture.

はじめに

擂鉢文化と擂鉢三点セット。日本の中世以降の生活文化を解きあかす言葉として以前より用いてきたが[荻野 1990]、擂鉢文化は、陶製擂鉢を中心に木製品の擂粉木と切匙(せっかい)が一体となってつくりあげた文化である。ただ擂粉木については、中世の古い段階は陶磁器の破片を利用した場合が多いとも言わ

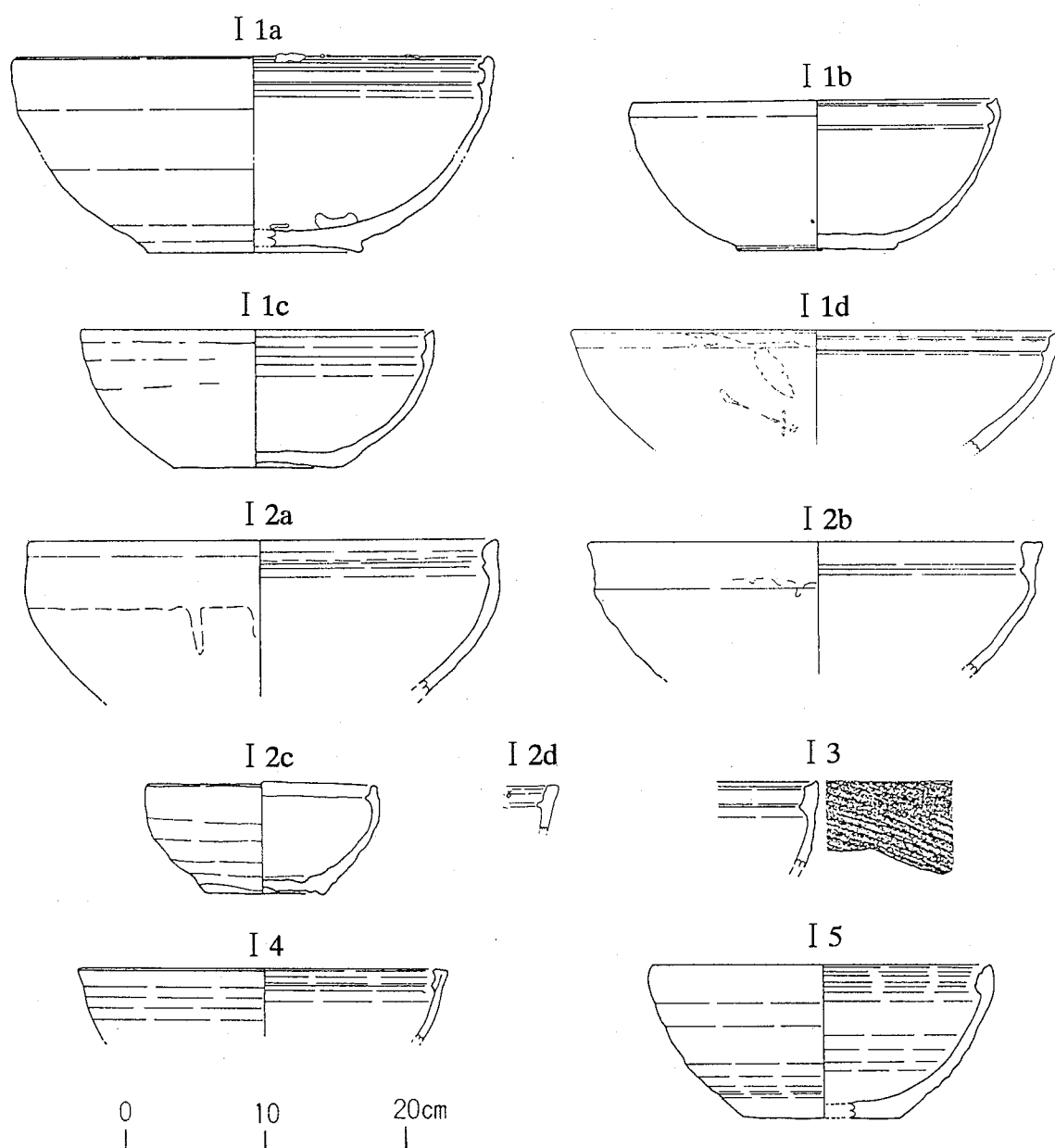
ている[馬淵 1993]。中には現在にその姿をとどめめないものもある。切匙がそれで、恐らく江戸時代の終わりには姿を消したものと思われる。中世以降の遺跡調査において、必ずといってよいほど出土するのが播鉢で、生活必需品として大量に消費されてきた。播鉢自体は単純な形をしているが、一般的には内面に播目のないものが捏鉢、播目のあるものが播鉢と呼ばれている。私自身は、両者ともその使用痕からすると、ゴロゴロと今にも音がしそうで、用語としては播鉢を用いるのが適当ではないかと考えている。この播鉢は様々な食文化をうみ出す万能容器で、現在に至るまで広く利用されてきた。があまりにも日常生活に密着したものであったがゆえに、一部寺院の財産目録を除いて、人々の生活文字記録の中にその姿を認めることはほとんどない。そのような播鉢であるが、それぞれに時代的特色をもちながら各地で焼かれていた。

西国の場合、広域に流通し消費されていたのが、中世前半では東播焼播鉢であり、中世後半では備前焼播鉢である。この両者は播鉢の二態をよく表している。つまり捏鉢と呼ばれているのが東播焼播鉢であり、播鉢と呼ばれているのが備前焼播鉢であるが、播目のない東播焼播鉢にしても、内底が磨り減って薄くなるまで使用されていた。またこうした国産播鉢以外にも、中国などの外国から入ってきたものがあり、播目をもった播鉢と、播目をもたず中国での用途を限定しえない鉢がある。独特な口縁部の形をしたこれらのものは、国産播鉢とどのような関係にあったのか、国内で播鉢として利用されたであろう中国産の鉢について少し考えてみたい。

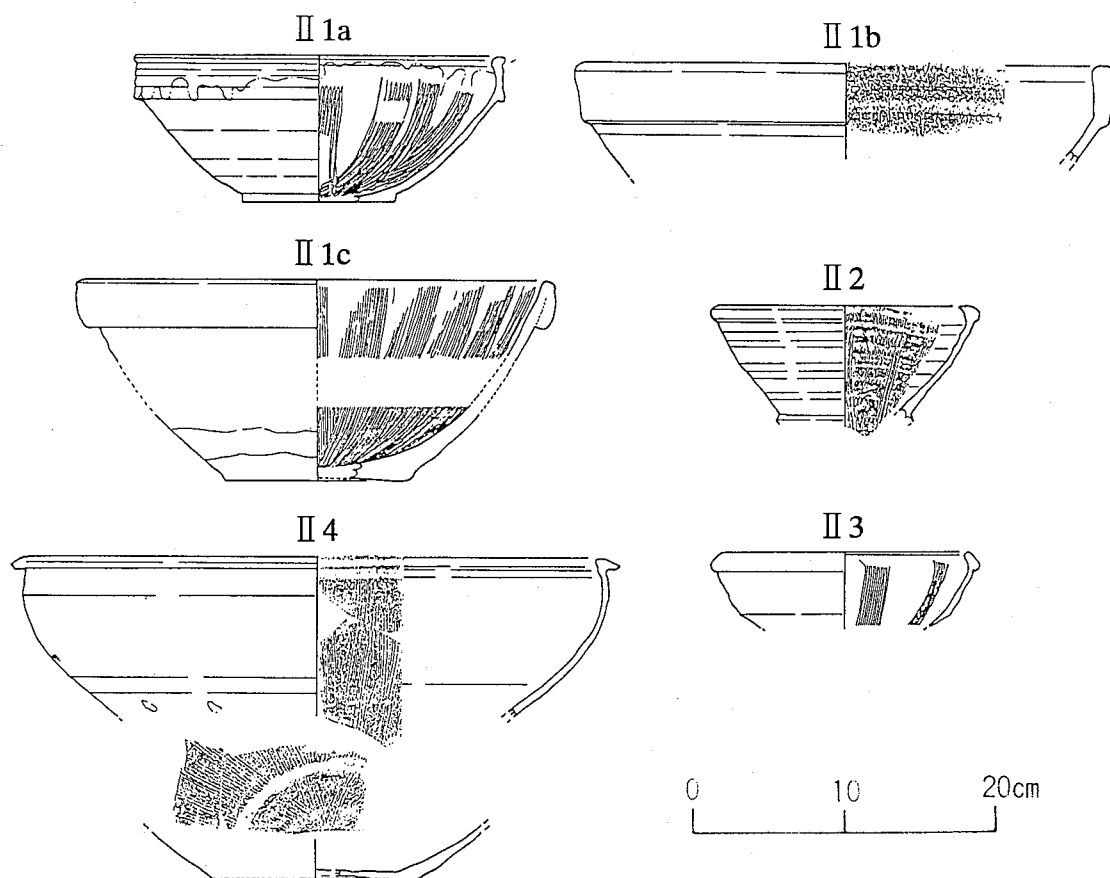
なおここでは、11 世紀中葉から 17 世紀前葉を次のように 11 期区分する。Ⅰ期からⅢ期（11 世紀中葉から 12 世紀前葉）、Ⅳ・Ⅴ期（12 世紀中葉・後葉）、Ⅵ期（13 世紀前葉・中葉）、Ⅶ期（13 世紀後葉・14 世紀前半）……、さらには適宜、南北朝時代の 14 世紀後半を境に中世前半と中世後半に区分しておく。

I. 中国産播鉢の分類と

ある形態的特徴をもった中国産の鉢の内底をみると、磨り減ってつるつるの面をなし、口縁部に小さな片口をもつものがある。また千葉地遺跡（相模国）出土のものは、内面の突帯より底部にかけ、つるつるに磨滅している[千葉地遺跡 1982]。この特徴をもって播鉢とした。こうした容器については、既に山本信夫氏と森本朝子氏によって、それぞれに分類がなされている。山本氏はこの種の容器について、次のように分類される[山本 1983]。胎土は大粒の白色粒を多く含む粗手で暗紫灰色をなすものが多く、平底で体部は丸みを持ち播目のないものをⅠ類とし、無釉のものと薄く釉薬のかかったものがある。そして口縁部や成形技法の違いによって 2～3 類に分けられる。また播目をもつものをⅡ類とし、無釉で口縁部を長く肥厚させるものと、暗灰褐色の釉薬をかけたもので、口縁部に突帯をもつものがある。一方、博多出土の中国産陶器を中心に、胎土によって 3～4 グループに分類された森本氏は、生産地域に対応したものとして、大きく A 群・B 群・C 群に分類され、そのうちの B 群と C 群両者に播鉢が含まれている[池崎 1984a]。B 群の播鉢は内面に細かな播目をもつ。胎土は緻密で、器面にはオリーブ色から灰オリーブ色に発色した釉薬をもち、越州窯青磁地域のものである可能性が指摘されている。数多くが帰属する C 群の播鉢には、播目のないタイプと播目をもつタイプがあり、胎土は緻密で大粒の砂混じりのものもある。黒褐色の釉薬をかけたものもあり、長江下流域のものである可能性が指摘されている。



第 1 図 中国産播鉢型式図(1) I 1a(太宰府市教委 1984), I 1b(九州歴史資料館 1991), I 1c(池崎他 1984a), I 1d(大庭 1995), I 2a(森本他 1982), I 2b(前川・新原 1976), I 2c(九州歴史資料館 1989), I 2d(大庭 1995), I 3(井澤編 1993), I 4(濱石・小畑・池崎 1988), I 5(小畑 1992)



第 2 図 中国産播鉢型式図(1) I 1a(太宰府市教委 1984), I 1b(九州歴史資料館 1991), I 1c(池崎他 1984a), I 1d(大庭 1995), I 2a(森本他 1982), I 2b(前川・新原 1976), I 2c(九州歴史資料館 1989), I 2d(大庭 1995), I 3(井澤編 1993), I 4(濱石・小畑・池崎 1988), I 5(小畑 1992)

播鉢として利用されていたと思われる鉢は、現在までに 210 点を確認しているが、いくつかのタイプに分類できそうだ。胎土の特徴から分類してみると、森本氏の言われる C 群に属するものが多いようだが、形の特徴からさらに分類してみたい。

まず内面播目の有無によって大きく分けてみる。内面に播目をもたないタイプを I 類、内面に播目をもつタイプを II 類とする。I 類は口縁部の特徴によって 5 つに、さらに 1 類と 2 類をそれぞれ 4 つに細分する(第 1 図)。

I 1 類 口縁部内側に二条の突帯をもつ。

- a 口縁部のつくりはシャープで、間隔のある二条の突帯は上面に明瞭な窪みをもつ。
- b 口縁部内側の二条突帯は、頂上部が弱く窪みがちである。
- c 口縁部頂上は内傾の面をなし、二条突帯はシャープな稜を形成する。
- d 口縁部頂上は内傾の面をなし、二条突帯は乳状に突起する。

I 2 類 口縁部内側に一条の突帯をもつ。

- a 口縁部内側の突帯はシャープで、頂部から滑らかに突帯部へといたる。
- b 体部上方で屈折気味に立上り、口縁頂部は幅広・水平気味で、口縁部付近と底部付近を中心に厚

手のつくりである。

- c 体部上方で強く立上り、口縁部は真直ぐにのびる。
- d 口縁部上部は水平で、内面には一条の明瞭な乳状突起を形成する。

I 3 類 口縁部内側が断面台形状に肥厚する。

I 4 類 口縁部は内側に折返して断面M字状に肥厚させる。

I 5 類 厚手のつくりで口縁部内側が強く肥厚し、数本の沈線（細かい段）がはいる。

内面に播目をもつII類を、口縁部の形によって次のように細分する（第2図）。

II 1 類 幅広な口縁部をもつ。

- a 折返し口縁で幅広・薄めの縁帯を形成し、つくりがシャープである。口縁部上方が外方に張りだすものが多い。
- b 折返し口縁でぶ厚くつくられている。
- c つくりは厚手で、口縁部外面に粘土を貼りつけ縁帯部を形成する。

II 2 類 小型で強く肥厚した口縁部は内側に強く折れる。

II 3 類 小型でハンマー型の口縁部をもつ。

II 4 類 大型のもので体部上方が強く立上り、嘴状の口縁部をなす。

以上I類は11類にII類は6類に細分した。口縁部形態による分類ではあったが、よく似た形状のものばかりではある。特徴あるものは一応分類し型式設定しておいた。

さて報告書によって資料を集めてみると、分類不明なものを含め確認しえたのは210点と少ないが、実際にはもっと多くのものが使われていたであろう（表1）。一覧表を掲げておくのでご覧いただきたい。このうちI類が圧倒的に多くて172点あり、なかでもI 1c類54点、I 1b類50点、I 2b類14点、I 3・I 5類が各13点、I 2a類が10点などとなっている。特にI 1類は、a・b・c・d類とも同系の特徴的口縁部をもつものであり、これを同類のものとするれば113点と圧倒的な数である。一方II類は36点と少ないが、この中ではII 1a類が多くて21点、以下II 1b類が6点、II 3類4点などである。以上の出土数をみると、I類とした内面に播目のないタイプが圧倒的に多かったことを、特徴としてあげることができる。

出土する資料はほとんどが破片であり、正確な大きさは不明だが、口径の復元可能な108点によると、ほぼ口径30cm台、20cm台、10cm台の大中小がある。大型の30cm台は22点でI類17点、II類5点、中型の20cm台は66点でI類53点、II類13点、小型の10cm台は17点でI類10点、II類7点と中型の20cm台が圧倒的に多い。なお口径40cm台の超大型品も3点ほどあるが破片でもあり、こうしたものが一般的にあったかどうかかわからない。器高の方は10cm前後のものが多い。

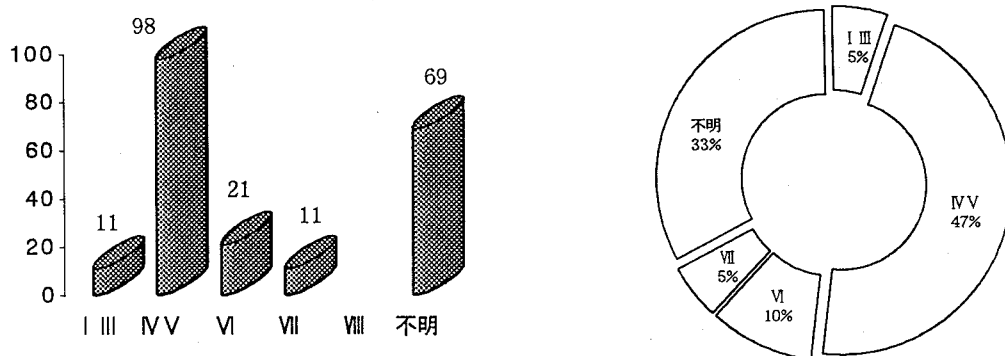
胎土からはほとんどが森本氏分類のC類に属すると思われ、長江下流域のものである可能性も指摘されている点は既に述べた。粗くて白色小石粒を含むものが多い。

焼成の方は良好で硬質に焼き上がり、器面は褐色で釉薬のかかったものと無釉のものがあるようだ。釉薬の記述があるもの23点では、褐釉系のものが中心でII 1a類に多い点が目立つ。一方無釉と記述のある47点をみると、I 1b類21点、I 1c類15点と、ほとんどはI類である。したがってI類は無釉のもの、II類は施釉系のものが中心であったと思われる。いずれも重ね焼きがなされていたようで、底部内外面と口縁部内面に目痕を残すものがあり、大宰府条坊跡第19次調査・I 1a類は、内面に6個の目痕を残す[太宰府市教委1984]。また御笠川南条坊遺跡第6次調査・II 1a類では、外面口縁部直下に12カ所、内面に11カ所の重ね土痕が認められる[前川・新原・馬田1977]。これらは大型のものであるが、中型のものは（有田・小田部遺跡第32次調査・I 1c類）、外底部に4カ所の突起、内底にも目痕を残す[井澤1983]。II類は丁寧に焼かれたのであろうか。

表 1 中国産播鉢の型式別出土数・遺跡数

型 式		Ⅰ Ⅲ		Ⅳ Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		不 明		総 数	
		出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土	遺跡
Ⅰ	Ⅰ 1a	0	0	7	5	0	0	0	0	0	0	1	1	8	6
	Ⅰ 1b	1	1	27	17	6	4	4	1	0	0	12	7	50	27
	Ⅰ 1c	4	4	32	21	5	4	2	2	0	0	11	6	54	30
	Ⅰ 1d	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	Ⅰ 2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	1	3	1
	Ⅰ 2a	1	1	5	4	1	1	0	0	0	0	3	1	10	5
	Ⅰ 2b	2	2	5	5	1	1	2	2	0	0	4	3	14	12
	Ⅰ 2c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
	Ⅰ 2d	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
	Ⅰ 3	1	1	7	5	0	0	1	1	0	0	4	4	13	10
	Ⅰ 4	0	0	1	1	2	2	0	0	0	0	1	1	4	4
	Ⅰ 5	0	0	5	5	0	0	1	1	0	0	7	5	13	10
Ⅱ	Ⅱ 1a	0	0	3	2	5	5	0	0	0	0	13	8	21	15
	Ⅱ 1b	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4	2	6	4
	Ⅱ 1c	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
	Ⅱ 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
	Ⅱ 3	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	1	1	4	2
	Ⅱ 4	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	1	3	2
不 明		1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	2	2
合 計		11	9	98	42	21	15	11	7	0	0	69	29	210	72

※ I 2型式については細分すべきだが詳細不明。



グラフ 1 中国産播鉢の型式別出土数(左)とその割合

II類の特徴である播目については3種類ある。多いのが6 8本を1組としたII 1a類で、II 1b類は14本1組、II 3類13本1組、またやや粗目のII 1a類と細かめのII 1b類・II 3類に分けられる。口縁部は折返し口縁である。成形技法のわかる資料は少ないが、外面に接合痕を残すものもあり(博多遺跡群第25次調査・I 1a類、[下村・横山 1985])、紐づくりによるものであろうか。内外面共ヨコナデロクロ調整を施すものが多いが、体部外面下半にヘラ削りを施すものがII類に何点かある。注目されるのは叩き技法で、右下がりの平行条線状叩き痕を残すものが、I 3類を中心に一部I 2a類にも認められる。

II. いづろのものであろうか

中国産播鉢は日本において、いづろ使用されていたのであろうか。消費地日本での出土にはかなりの年代幅があり、あくまでも消費地年代である点を考慮しておかなければならないが、そのものから年代を決定するのが困難であるため、共伴資料によって消費地年代を考えてみる。

I 1a 類。大宰府条坊跡第 19 次調査 SK004 より良好な資料が出土している[太宰府市教委 1984]。数は少ないが土師器には小皿 a・杯 a・大杯 a があり、いずれも糸切底である。また国産品として東播焼と常滑焼の甕があり、13 世紀初めのものと思われる。一方中国産陶磁器では多数の陶器類以外にも、わずかだが、まず白磁類として碗 IX・IX1 類、皿 VIII2b 類などがあり 13 世紀前葉以降のものである。青磁では龍泉窯系が多く、碗 I 1・I 4a・皿 2 類、杯 I 2a 類があり、古いものとして I 4a 類が 12 世紀中葉以降、一方皿類は 13 世紀中葉以降に出土する。同安窯系では碗 I 1a 類・皿 I 1b 類があり、いずれも 12 世紀中葉以降出現するものである。このように 12 世紀中葉以降 13 世紀中葉にかけての資料である。

I 1b 類。まず博多遺跡群第 56 次調査 0196 号土壌資料をあげる[濱石・菅波・林田 1993]。数は少ないが土師器として小皿や丸底杯・杯があり、いずれもヘラ切底で糸切底は確認できない。白磁では碗 IV 類、越州窯系青磁碗などがあり、碗は 12 世紀前葉には出現するものである。以上土師器と白磁碗の特徴より、12 世紀前葉に位置付けておきたい。12 世紀中葉のものとして、博多遺跡群第 50 次調査 642 号土壌がある[大庭 1991b]。土師器の皿・杯とも、ヘラ切底のものと糸切底のものがある。白磁がほとんどを占める磁器類では、碗 II 1・IV 1 類、一方青磁では龍泉窯初期の碗があり、白磁碗は 12 世紀前葉には確認できるものである。また国産品である東播焼播鉢は、12 世紀中葉でも古い所に位置付けられる。次に大宰府条坊跡 II (6AYE 地域) 050 土壌では、出土した土師器のうち、小皿 a にはヘラ切底のものと糸切底のものがあり、杯 a、丸底杯 a はヘラ切底である[山本 1983]。また国産の東播焼甕と播鉢が出土しており、12 世紀中葉でも古いものである。一方白磁として皿 III・IV1b 類があり、前者は 12 世紀中葉、後者は 14 世紀中葉以降に確認されるもののようだが、いかなるものであろうか。一応 12 世紀中葉のものとしておきたい。博多遺跡群第 45 次調査 3056 号井戸では、出土した土師器の皿・杯のうち多くはヘラ切底であるが、一部糸切底も認められる[田崎・小林 1991]。白磁では碗 II・IV・VI 類、皿 III 類、さらには広東系壺があり、古くは 12 世紀前葉にまで遡ることができる。龍泉窯系青磁碗もわずかにある。こうした特徴から 12 世紀中葉としておく。この他、博多駅築港線関係遺跡第 4 次調査 1020 号土壌でも、ヘラ切底と糸切底の土師器皿・杯、白磁碗 II・IV・V 類などがあり[松村 1989]、12 世紀中葉と思われる。博多遺跡群第 36 次調査 218 号土壌からは、北宋末前後の龍泉窯に共通した青磁碗が出土した他、白磁碗 IV・V 類、糸切底の土師器皿・杯などがあり[山口 1991]、12 世紀中葉が考えられる。12 世紀後葉のものとして、博多遺跡群第 59 次調査 11 号土壌資料がある(山口・亀井 1993)。ここでは白磁の碗 IV1・V・VIII2 類や皿・四耳壺、龍泉窯系青磁皿、同安窯系青磁皿、それに少量の糸切底土師器、常滑焼の甕がある。博多高速鉄道関係遺跡第 4 次調査(祇園駅 2・3 出入口)の 1 号井戸より、355 点にものぼる中国産陶器が出土している[池崎 1984b]。火災にあって廃棄されたものらしく、あるものは商品として、あるものはコンテナとして利用されたもののようだ。青磁が圧倒的に多く、龍泉窯系青磁碗は 147 点で I 4・I 3 類が多い。同安窯系青磁では、平底皿が 89 点出土しているが碗類は少ない。陶器類の瓶・鉢・盤・壺・甕類が 37 点ほどある。12 世紀中葉から後葉のものである。新しい資料として、大宰府条坊跡第 33 次調査 605 号溝 IV 層出土のものをあげておく[九州歴史資料館 1975]。出土した土師器では小皿・杯とも糸切底である。国産品の東播焼播鉢は VI 期の典型である。中国陶磁器では龍泉窯系青磁が圧倒的に多く碗 26 点、一方同安窯系青磁碗・皿はわずかで、また白磁も少なく皿が 5 点である。注目すべきは、『貞応三年十一月二十日』(1224 年)と記した墨書木札が出土している点であり、この点からも 13 世紀前葉の年代が考えられる。

I 1c 類。まず 12 世紀初期と考えられるものに、博多駅築港線関係遺跡第 4 次調査 983 号土壌資料と[松

村 1989]、博多駅築港線関係遺跡第2次調査 626 号土壌資料がある[力武・大庭 1988]。両者に共通した特徴として、ヘラ切底をもつ土師器の皿や杯がある。前者からは白磁碗Ⅳ・Ⅴ類も出土している。次に12世紀中葉のものをあげてみる。博多高速鉄道関係遺跡第4次調査(本体部A・B区)3号溝では、土師器の小皿・杯は、ヘラ切底と糸切底のものが相半ば出土している[池崎 1984a]。磁器類では白磁が圧倒的に多く、碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ類などが、また龍泉窯系青磁碗や同安窯系青磁碗なども認められる。このように土師器のヘラ切底・糸切底の皿や杯を伴うものとして、博多駅築港線関係遺跡第4次調査 1058 号土壌と同 1082 号土壌があり[松村 1989]、両者とも白磁のみが確認され、碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類がある。有田・小田部遺跡第32次調査井戸では、Ⅰ1c 類が3点出土している[井澤 1983]。ここでは多量の陶磁器類が出土しており、土師器の皿 124 点・杯 77 点とも糸切底である。国産品では東播焼播鉢 4 点も出土し、12 世紀中葉から後葉のものである。磁器類では白磁碗が 65 点でⅡ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類、皿は 12 点でⅢ・Ⅳ・Ⅶ1b 類があり、碗Ⅳ・Ⅴ類と皿Ⅲ類が多い。一方青磁も 71 点出土し、同安窯系が 46 点と多く龍泉窯系は 16 点である。このように土師器の糸切底や東播焼播鉢、白磁と青磁が相半ば出土している点から、12 世紀中葉に位置付けておきたい。また博多遺跡群第 36 次調査 217 号土壌では、出土した土師器の小皿・杯はヘラ切底と糸切底のものが共存し[山口 1991]、東播焼播鉢は 12 世紀後葉でも古い段階のもの、白磁は碗Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ、皿Ⅱ類で、やはり 12 世紀中葉から後葉にかけてのものである。博多遺跡群第 48 次調査 300 号溝は[小畑 1992]、12 世紀中葉から後葉のものである。皿 13 点・杯 22 点の土師器は、いずれも糸切底である。白磁は 29 点で碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ類、皿Ⅵ類、青磁は 23 点で龍泉窯系碗Ⅰ類・皿Ⅰ類と同安窯系碗Ⅰ類・皿Ⅰ類がある。12 世紀後葉のものとして、博多遺跡群第 37 次調査 57 号土壌があり[山口 1991]、糸切底の土師器小皿、瓦器碗、東播焼播鉢、白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、高麗青磁碗などがある。東播焼播鉢は 12 世紀中葉から後葉、白磁は皿Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ類、碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ類、龍泉窯系青磁碗には龍泉Ⅱ期のものがある。

Ⅰ1d 類。博多遺跡群第 62 次調査の 5532 号土壌から出土している[大庭 1995]。資料が少なくはっきりしないが、併出した資料からすれば 12 世紀代前葉まで遡る可能性がある。

Ⅰ2a 類。博多高速鉄道少なく、博多高速鉄道関係遺跡第4次調査(祇園駅 2・3 の出入口)の井戸でⅠ1b 類と共に出土しており[池崎 1984b]、12 世紀中葉から後葉のものである。

Ⅰ2b 類。御笠川南条坊遺跡第3次調査(6AYEBM 区)の 341 号土壌では、土師器の小皿 31 点・高台付小皿 6 点・碗 4 点・高台付碗などが出土し、いずれもヘラ切底である[前川・新原 1976]。12 世紀前葉のものである。床波海底遺跡のある鷹島は、「弘安の役」(1281 年)の蒙古襲来に際し、多くの軍船が大暴風雨によって沈没難破した場所で、海底より青磁陰刻蓮弁文碗・褐釉瓶・黒褐釉瓶などが、一緒に引き揚げられている[高野 1984]。

Ⅰ3 類。博多駅築港線関係遺跡第1次調査 39 号井戸資料があり[池崎 1988]、12 世紀前半としておく。土師器の皿類ほとんどがヘラ切底である。磁器類は白磁がほとんどで、碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、高台付皿Ⅰ・Ⅲ類、平底皿Ⅱ類がある。一方青磁は少なく、越州窯系青磁と同安窯系青磁、それに龍泉窯系青磁碗でも古いものが認められる。博多遺跡群第 66 次調査 SE03 より、土師器や東播焼播鉢・瓦器碗、青磁碗・皿、白磁碗・皿などが出土している[井澤 1993]。東播焼播鉢は 12 世紀中葉のものである。また博多駅築港線関係遺跡第4次調査 1082 号土壌出土の土師器皿・碗などには、糸切底のものとヘラ切底のものがある[松村 1989]。白磁が多く、碗ではⅡ・Ⅳ・Ⅵ類が認められる。こうした点から 12 世紀中葉に位置付けておく。

Ⅰ5 類。博多遺跡群第 46 次調査 156 号ピットでは、数は少ないが、龍泉窯系青磁碗が出土して龍泉窯南宋前半のものと指摘されており[吉留・亀井 1992]、12 世紀後半と考えられる。御笠川南条坊遺跡第3次 312 号土壌では、土師器の小皿 38 点・高台付小皿 39 点・杯 26 点と、いずれも糸切底のものが多数出土している[前川・新原 1976]。磁器は白磁の碗Ⅴ類、皿Ⅲ・Ⅶ類のみである。12 世紀中葉に位置付けられるか。12 世紀後

葉のものとして博多遺跡群第48次調査 300号溝があり[小畑 1992]、ここではⅠ1c類とともに出土している。

Ⅱ1a類。大宰府史跡第56次調査142号土壌では、ヘラ切底の皿や糸切底の杯・丸底杯などの土師器、白磁皿Ⅱ1類、龍泉窯系青磁皿や同安窯系青磁皿と共伴しており[九州歴史資料館 1979]、12世紀中葉に考えておきたい。豊前国・自在丸遺跡Ⅲ区1号溝では、糸切底の小皿16点・杯25点の土師器、瓦器碗27点、東播焼播鉢13点、常滑焼甕2点などの国産品以外に、数多くの青磁や数は少ないが白磁も出土している[伊崎 1992]。東播焼播鉢は12世紀後葉から13世紀前葉のものであり、また常滑焼甕も同じごろのものである。白磁は11点あり、中には口禿皿も4点ある。多くは龍泉窯系青磁碗で25点あり、Ⅰ2・Ⅰ4・Ⅰ5a・Ⅰ5b・Ⅰ6類など、新しい要素をもった蓮弁文碗がある。以上のように12世紀中葉から13世紀前葉が考えられる。

Ⅱ1b類。博多高速鉄道関係遺跡第6次調査(祇園町工区E・F・G区)217号土壌では、龍泉窯系青磁碗Ⅰ5・Ⅱ類、同安窯系青磁碗Ⅲ2類、青白磁合子蓋・碗、白磁碗Ⅳ類・高台付皿Ⅰ2類が出土しており[池崎・森本 1987]、13世紀前葉に位置付けられる。

以上いくつかの型式について、消費地からみた使用・廃棄時期を考えてみた。時期推定の資料に乏しくあいまいな点も多くあるが、ほぼ12世紀から13世紀代にかけて、使用・廃棄されたものであることが判明した。多数を占めるⅠ類では、1b・1c・1d類や2a・2b・3類それぞれの一部が、古くは既に12世紀前葉に使用・廃棄されたものと思われる。最も多いのが12世紀中葉から後葉のもので、Ⅰ1b・Ⅰ1c・Ⅰ2a・Ⅰ3・Ⅰ5類がかなりあり、特にⅠ1bとⅠ1c類は顕著である。またⅠ1a類も13世紀代と報告されているが、12世紀後葉にまで遡る可能性がある。13世紀前葉のものとしてⅠ1b類があり、さらにそれ以降のものとして、報告書からするとⅠ1b・Ⅰ1c・Ⅰ2b・Ⅰ3類もあげられるが、こうしたものは廃棄・埋没した段階のものであり、実際はそれ以前に使用されていたものと考えられる。一方資料の少ないⅡ類は不明な点も多いが、1a類の何点かは12世紀後葉の遺構より出土し、1b類は13世紀前葉の遺構から出土する。他の資料をみてもⅠ類はやや新しい傾向を示し、12世紀後葉から13世紀前葉のものと考えておきたい。

合計210点の型式別・時期別内訳を表1とそれぞれの割合をグラフ1でご覧いただきたい。共伴資料の不明なものが多く、不明69点であるが、全体の約67%にあたる141点のうち、ⅠⅢ期にはⅡc類が4点である。Ⅳ・Ⅴ期になると、Ⅰ1c類が32点、Ⅰ1b類が27点で、この時期の中心である。Ⅰ1b・Ⅰ1c類はこの後もⅥ期、Ⅶ期と一定数出土している。Ⅱ類では1a類がⅥ期6点と目立つ。

Ⅲ. 中国産播鉢の出土状況について

播鉢としての機能をもつと考えた中国産の鉢は72遺跡より出土しており、Ⅰ1c類が30遺跡、Ⅰ1b類27遺跡、Ⅱ1a類15遺跡、Ⅰ2b類12遺跡、Ⅰ3類とⅠ5類がそれぞれ10遺跡と、圧倒的にⅠ1b・Ⅰ1cが多い(表1)。地域的には、筑前国65遺跡201点、肥前国4遺跡4点、筑後国1遺跡3点、豊前国1遺跡1点、相模国1遺跡1点と、遺跡調査の進展具合にもよるが、筑前国よりの出土が顕著である(表2)。さらに筑前国でも旧博多では、30遺跡より142点を確認している。これについて多いのが大宰府関連遺跡で、17遺跡より29点を確認できる。このように旧博多と大宰府関連での使用が顕著であった。なおこれ以外では、旧博多近辺からも16遺跡24点と多い。つまり、12世紀代の筑前型あるいは博多型播鉢ともいえるものである。

各遺跡では、1点から数点といった資料が多いが、旧博多ではかなりの点数を出土する遺跡も認められる。最も多くの点数を確認したのが博多遺跡群第4次調査(博多区冷泉町7-1)で[森本他 1982]、Ⅰ類12点、Ⅱ類11点と23点あり、Ⅱ類の数が多いのが特徴である。ついで博多駅築港線関係遺跡第4次調査(博多区上呉服町)では[松村 1989]、Ⅰ類20点・Ⅱ類1点と21点を確認できⅠ類が多い。3番目に多いのが博多遺跡群第62次調査(博多区御供所町224他)で[大庭 1995]、Ⅰ類16点・Ⅱ類1点と17点を確認できる。これ以外では10点、8点などと少数の出土例が続く。多数出土した旧博多の3遺跡について、他の遺跡と比較

した場合のそれぞれの特徴を現状では明らかにしえない。しかし旧博多内での出土数の多さは、周辺地域の同時代の遺跡と比較しても特筆すべきものである。例えば早良区の田村遺跡[佐藤 1987]、東区の箱崎遺跡[田中 1992]、南区の柏原K遺跡[山崎 1987]、粕屋郡粕屋町の戸原麦尾遺跡[田中 1990]などでは、中国産の出土数が少ないか確認できていない。

表2 筑前出土の産地別・時期別の出土数・遺跡数

産地	I III		IV V		VI		VII		VIII		IX		X		XI		不明		総数	
	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土数	遺跡数	出土	遺跡
筑前	0	0	12	5	55	29	85	29	115	42	55	23	26	16	1	1	66	33	415	104
東播	17	16	91	51	77	44	85	44	0	0	0	0	0	0	0	0	10	8	280	103
備前	0	0	0	0	2	2	13	10	30	23	60	33	37	28	60	21	19	9	221	77
中国	11	9	95	39	19	12	10	5	0	0	0	0	0	0	0	0	66	27	201	66
周防	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	20	14	4	3	12	9	37	24
篠	7	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	5
肥前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	4	4
十瓶山	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
常滑	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
筑前東	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	2	1
李朝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2	2
豊前周防	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1
北九州	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
合 計	37	27	198	69	155	67	193	59	145	54	118	49	83	43	70	24	176	71	1175	199



中世前半(Ⅶ期まで)の出土数のみ抽出

	I III	IV V	VI	VII	VIII	総数	割合(%)
東播	17	91	77	85	0	270	37
筑前	0	12	55	85	115	267	37
中国	11	95	19	10	0	135	19
備前	0	0	2	13	30	45	6
篠	7	0	0	0	0	7	1
十瓶山	2	0	0	0	0	2	0
常滑	0	0	2	0	0	2	0
合 計	37	198	155	193	145	728	

中世前半(Ⅶ期まで)の遺跡数のみ抽出

	I III	IV V	VI	VII	VIII
東播	16	51	44	44	0
筑前	0	5	29	29	42
中国	9	39	12	5	0
備前	0	0	2	10	23
篠	5	0	0	0	0
十瓶山	2	0	0	0	0
常滑	0	0	1	0	0
合 計	27	69	67	59	54

一方でこうした遺跡出土の播鉢には特徴がある。つまり東播焼が多く箱崎遺跡 21 点以上、柏原K遺跡 15 点、田村遺跡 12 点、戸原麦尾遺跡 10 点である。もっとも、旧博多の中にも博多駅築港線関係遺跡第3次調査のように[大庭 1991b]、東播焼 12 点、中国産 2 点のようなものもあるが、こうした例は少ないようである。また博多遺跡群第 66 次調査(博多区御供所町 129-1)のように[井澤 1993]、中国産 10 点、東播焼 9 点とほぼ両者が同じ程度出土するものもある。

以上確認できた資料からすると、中国産が多く東播焼が少ない遺跡(A)、中国産と東播焼がほぼ同じぐらい確認できる遺跡(B)、東播焼が多く中国産が少ない遺跡(C)の3つに分類でき、(A)は旧博多に、(B)は大宰府関連遺跡、(C)はそれ以外の地域に多いことがわかる。

旧博多や大宰府関連遺跡を中心としたこの時期の中国産播鉢の多さは、調査研究の進んだ北九州市地域と比べても特筆すべきものである。北九州市地域の中世遺跡も数多く調査されているようだが、現在のところ私自身、中国産播鉢を確認していない。かわりに数多く認められるのが東播焼で、39 遺跡より 172 点を確認しており、ほぼどの遺跡からも出土するといつてよいようだ。I～Ⅲ期 26 点、IV・V期 60 点、VI期 68 点、Ⅶ期 15 点と他の地域と比べても数の多さが目立ち、しかも古い段階のものが多いのには驚かされる。愛宕遺跡 22 点(I～Ⅲ期 9 点、IV・V期 8 点、VI期 4 点、Ⅶ期 1 点)、潤崎遺跡 18 点(I～Ⅲ期 1 点、IV・V期 4 点、

Ⅵ期 13 点)、白岩遺跡 16 点 (Ⅰ～Ⅲ期 7 点、Ⅳ・Ⅴ期 9 点)、長の A 遺跡 14 点 (Ⅰ～Ⅲ期 2 点、Ⅳ・Ⅴ期 4 点、Ⅵ期 6 点、Ⅶ期 2 点) などが目立ったところである[谷口・上村 1986、山手・宇野 1986、山手・藤丸 1980、山口・佐藤 1987、柴尾 1987]。こうした東播焼以外に地元産も認められるが、圧倒的に東播焼が多く中国産は姿をみせないのである。

肥前国では、圧倒的に広く使用されていたのが東播焼で、42 遺跡より 221 点を確認している。Ⅰ～Ⅲ期 5 遺跡 10 点、Ⅳ・Ⅴ期 19 遺跡 103 点、Ⅵ期 19 遺跡 52 点、Ⅶ期 13 遺跡 49 点で、東播焼は中世前半段階において重要なものであったことがわかる。

以上のように、旧博多や大宰府関連遺跡での中国産播鉢は、周辺地域の播鉢使用数と比較しても、数の多さにその特異性がうかがえる。

まとめ

210 点の中国産播鉢。播目のないⅠ類と播目のあるⅡ類、前者は口縁部内側に突帯をもった特異な形をし、後者は細かな播目をもった典型的な播鉢で、日本国内で使用された播目をもつ播鉢の最初であった。圧倒的に多いのは前者のものであるが、口縁部の形などからして、播鉢として使用するにはほど遠いにもかかわらず、内面の内底さらには内壁の磨り減っているものが多いことから播鉢としてとらえた。Ⅰ類に関しては今のところ、生産資料としても確認しえていない。口縁部の特徴からすれば気が付いてもよさそうだが、報告書を見る限りにおいては確認しえない。恐らく鉢として報告されているものと思われるが不明である。一方Ⅱ類も一部を除いて同類のものは報告書では確認しえない。中国で確認しえないものが、日本では一部の地域であったにせよ、大いに活躍したのである。本来の用途としてではなく、Ⅰ類は日本の地で人々によって新しい息吹が吹き込まれた。

Ⅰ・Ⅱ類とも、胎土の特徴より長江下流域で焼かれたことが推測され、宋代の生産資料を見ると、点々とはあるが確認しえる。恐らく、中国でも長江下流域では大いに使用されていたのであろう。鉢であった A タイプと B タイプの播鉢は日本に輸入され、九州北部の一角、特に旧博多や大宰府近辺という極めて限られた地域で使用されたまま、商品として、こうした地域から外へはほとんど出ることなかったようだ。まさしく博多型あるいは筑前型播鉢とでもいうべきものであった。播鉢を使用していたのは、中国の人であろうか、それとも日本の人であろうか。

この種の商品に関しては、日本国内では全く販路をもたなかったようだ。しかしⅡ類は大きな影響を与えた可能性も指摘できるのではないか。それは播目播鉢の日本への採用という事実を表されている。珠洲焼など一部を除いて、もっとも早くこの播目を取り入れたのが備前焼で、13 世紀代になると確実に存在する。プロポーションは伝統を維持しながらも、播目を取り入れて機能アップをはかり、商品的価値を高めたとも考えられる。商品的価値を考え、人々の支持を得ることに成功したのは、歴史的にみてもこの備前焼播鉢が最初であったようだ。中国産Ⅱ類と備前焼を直接に繋ぐものは不明だが、この両者の関係は大いに考えてよい。日本で使用された 2 種類の播鉢、12 世紀代にⅠ類、12 世紀代後葉から 13 世紀前葉にかけてⅡ類のものが使用されたと推測され、その接点が浮かび上がってくる。以前にも指摘したことだが、いち早く中国産播鉢Ⅱ類を目にした九州北部地域の人々が、播目播鉢を模倣したことも考えられるが、備前焼にも大きな影響を与えたことを考えてみたい。中国産播鉢は、日本の播鉢に大きな影響を与えたと考えられるのである。

筑前国では少なくとも 202 点を確認しており、東播焼が 280 点 (11 世紀中葉から 14 世紀前半)、それに筑前型と呼んでいる地元産が 415 点で (12 世紀後葉から 16 世紀代)、中国産のものは短期間にもかかわらず圧倒的な数を誇る。たとえばⅦ期までの資料数からすると、筑前型 152 点 (27%)、東播焼 270 点 (47%)、中国 135 点 (24%)、備前 15 点 (2%) である。12 世紀代では、中国産と東播焼をあわせた数は膨大なものに上り、播鉢文

化の拡大が大いに注目される。しかも広くいきわたった東播焼に比べ中国産は、九州北部の都市型播鉢文化を担っていたことがわかる。

出土数や出土遺跡からみれば、東播焼が旧博多や大宰府関連遺跡に流通しなかったとは考えられず、まず中国産が使用されていたために、東播焼の使用数が少なかったと思われる。このように両地では、東播焼が副次的なものであったと思われるが、一步離れると東播焼は重要な商品であった。中国からの商品一時集積地としての旧博多で、多量に出土する播鉢として、中国産播鉢の社会的位置付けが可能である。

うまれ故郷の中国とは違った用途に使用されたのかⅠ類と本来のⅡ類、日本において新たな使用方法を手にしたⅠ類は、日本的解釈によって地域性があつたにせよ、時代を代表するものとして、数は少ないが、重要な地位を占めることとなった。Ⅱ類は既に述べたように、日本播鉢文化の機能的原点ともなった播目をもたらしたとも考えられるのである。

日本の播鉢文化を構成した一員としての中国産播鉢について、資料を提示し考えてみた。おのずとこれら中国産播鉢については、生産地である中国での研究がまたれるが[安家援 1986、叶文寛 1989]、現実には資料が少ない。しかしながら、播鉢文化の基を成す重要な地域として注目し、議論がなされなければならない。その機会を得たい。

(1999 年 10 月)

REFERENCES

- 安家援 1986, 播鉢小論『考古』4, 科学出版社, 北京: 344-347
- 池崎譲二 1988, 博多 都市計画道路博多駅築港関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ(1次)『福岡市埋蔵文化財調査報告書』183, 福岡市教育委員会
- 池崎譲二他 1984a, 博多 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅳ)Ⅱ. 博多 第2章 本体部 A.B 区の調査『福岡市埋蔵文化財調査報告書』105, 福岡市教育委員会: 17-22
- 池崎譲二他 1984b, 博多高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅳ)Ⅱ. 博多 第3章 祇園駅 2.3 の調査『福岡市埋蔵文化財調査報告書』105, 福岡市教育委員会: 17-22
- 池崎譲二・森本朝子 1987, 博多 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅵ)Ⅱ. 博多 第2章 祇園町工区 E.F.G の調査『福岡市埋蔵文化財調査報告書』156, 福岡市教育委員会
- 伊崎俊秋 1992, 城井遺跡群 Ⅵ. 自在丸遺跡『犀川町文化財調査報告書』3, 犀川町教育委員会
- 井澤洋一 1983, 有田・小田部 第4集-第Ⅲ章 3. 第32次調査-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』96, 福岡市教育委員会: 86-88
- 井澤洋一編 1993, 博多 38-博多遺跡群第66次発掘調査概要『福岡市埋蔵文化財調査報告書』330, 福岡市教育委員会
- 大庭康時 1991a, 博多 都市計画道路博多駅築港関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ(3次)『福岡市埋蔵文化財調査報告書』204, 福岡市教育委員会

- 大庭康時 1991b, 博多 21-博多遺跡群第50次発掘調査概要『福岡市埋蔵文化財調査報告書』249, 福岡市教育委員会
- 大庭康時 1995, 博多 48-博多遺跡群第62次調査の概要-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』397, 福岡市教育委員会
- 荻野繁春 1990, 財産目録に顔をださない焼物『国立歴史民俗博物館研究報告』25, 国立歴史民俗博物館: 71-244
- 小畑弘己 1992, 博多 27-博多遺跡群第48次調査の報告『福岡市埋蔵文化財調査報告書』282, 福岡市教育委員会
- 叶文寛 1989, 播鉢源流考『考古』5, 科学出版社: 456-462
- 九州歴史資料館編 1975『大宰府史跡-昭和49年度発掘調査概報-』九州歴史資料館
- 九州歴史資料館編 1979『大宰府史跡-昭和53年度発掘調査概報-Ⅱ調査概報 5. 第56次調査』九州歴史資料館
- 九州歴史資料館編 1989『大宰府史跡-昭和61年度発掘調査概報-Ⅱ調査概報 5. 第109・111次調査』九州歴史資料館
- 九州歴史資料館編 1991『大宰府史跡-平成2年度発掘調査概報-Ⅱ調査概報 2. 第121次調査』九州歴史資料館
- 佐藤一郎 1987, 田村遺跡-Ⅳ-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』168, 福岡市教育委員会
- 柴尾俊介 1987, 長の A 遺跡 3『北九州市埋蔵文化財調査報告書』55, (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 下村 智・横山邦継 1985, 博多Ⅴ『福岡市埋蔵文化財調査報告書』120, 福岡市教育委員会: 9

- 高野晋司 1984『床波海底遺跡-長崎県北松浦郡鷹島町床波港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書-』鷹島町教育委員会・床波海底遺跡発掘調査団
- 田崎真理・小林義彦 1991,博多 20-第45次発掘調査-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』248,福岡市教育委員会
- 田中壽夫 1990,戸原麦尾遺跡(Ⅲ)『福岡市埋蔵文化財調査報告書』217,福岡市教育委員会
- 田中壽夫 1992,箱崎 3-箱崎遺跡群第5次調査の報告-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』273,福岡市教育委員会
- 谷口俊治・上村佳典 1986,愛宕遺跡Ⅱ,『北九州市埋蔵文化財調査報告書』46,(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 太宰府市教育委員会編 1984,大宰府条坊跡Ⅲ-Ⅱ 遺跡の概要(2)第19次調査-『太宰府市の文化財』8,太宰府市教育委員会:18-20
- 力武卓治・大庭康時 1988,博多 都市計画道路博多駅築港関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ(2次)『福岡市埋蔵文化財調査報告書』184,福岡市教育委員会
- 千葉地遺跡発掘調査団編 1982『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団:126-127
- 濱石哲也・小畑弘己・池崎譲二 1988,博多 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅶ)Ⅱ.博多 第9章 呉服町工区出入口『福岡市埋蔵文化財調査報告書』193,福岡市教育委員会
- 濱石哲也・菅波正人・林田憲三 1993,博多 34-博多遺跡群第56次発掘調査報告『福岡市埋蔵文化財調査報告書』326,福岡市教育委員会
- 前川威洋・新原正典 1976『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第3集 御笠川南条坊遺跡(2) 第3次調査』福岡県教育委員会
- 前川威洋・新原正典・馬田弘稔 1977『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集 御笠川南条坊遺跡(3) 第6次調査』福岡県教育委員会:86-87
- 前川威洋・濱田信也・新原正典・馬田弘稔 1978,『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集 御笠川南条坊遺跡(4) 第2次調査』福岡県教育委員会
- 松村道彦 1989,博多 都市計画道路博多駅築港関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ(4次)『福岡市埋蔵文化財調査報告書』205,福岡市教育委員会
- 馬淵和男 1993,すり鉢のあいかた『青山考古』11,青山学院大学:1-7
- 森本朝子他 1982,博多Ⅱ-図版編-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』68,福岡市教育委員会
- 山口譲治編 1991,博多 16-博多遺跡群第37次発掘調査報告-付編 博多遺跡群第36次調査資料『福岡市埋蔵文化財調査報告書』244,福岡市教育委員会
- 山口譲治・亀井明德 1993,博多 36-第59次調査報告-付編『福岡市埋蔵文化財調査報告書』328,福岡市教育委員会
- 山口義信・佐藤浩司 1987,長のA遺跡2『北九州市埋蔵文化財調査報告書』54,(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 山崎純男編 1987,柏原遺跡群Ⅲ 第4章 K遺跡の記録『福岡市埋蔵文化財調査報告書』157,福岡市教育委員会
- 山手誠治・宇野慎敏 1986,潤崎遺跡『北九州市埋蔵文化財調査報告』49,(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 山手誠治・藤丸詔八郎・山口義信 1980,白岩遺跡『北九州市埋蔵文化財調査報告書』3,(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 山本信彦編 1983,大宰府条坊跡Ⅱ-Ⅱ 遺跡の概要(2)6AYE 地域-『太宰府市の文化財』7,太宰府市教育委員会:16-19
- 吉留秀敏・亀井明德 1992,博多 26-博多遺跡群第46次発掘調査概要-『福岡市埋蔵文化財調査報告書』281,福岡市教育委員会

なお中国産陶磁器の分類と編年については、それぞれの報告書による他に一部は次の論文によった。

- 横田賢次郎・森田 勉 1978,大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心にして-『九州歴史資料館研究論集』4,九州歴史資料館普及会:1-26

(国立福井工業高等専門学校)

中国産播鉢出土一覧表(1)
※荻野 『中世陶磁器データベース』

旧国	遺 跡 名	所 在 地	型式	合計	I Ⅲ	Ⅳ V	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	不明
豊前	自在丸	福岡県京都郡犀川町大字上高屋	Ⅱ 1a	1	0	0	1	0	0	0
肥前	岡	長崎県東彼杵郡東彼杵町蔵本郷字岡	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
肥前	床波海底	長崎県北松浦郡鷹島町床波	I 2b	1	0	0	0	1	0	0
肥前	徳富権現堂	佐賀県佐賀郡諸富町大字徳富	I 2b	1	0	1	0	0	0	0
肥前	楼楷田	長崎県松浦市志佐町白浜免字楼楷田	I 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	下山門乙女田	福岡県福岡市西区下山門乙女田473	Ⅱ 1a	1	0	0	1	0	0	0
筑前	桑原1次	福岡市西区大字桑原字立浦762-1,877-1	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	戸原麦尾3	福岡県粕屋郡粕屋町大字戸原麦尾他	I 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	戸原麦尾3	福岡県粕屋郡粕屋町大字戸原麦尾他	I 4	1	0	0	1	0	0	0
筑前	戸原麦尾3	福岡県粕屋郡粕屋町大字戸原麦尾他	Ⅱ 1a	1	0	0	1	0	0	0
筑前	五十川高木	福岡県福岡市南区大字五十川高木町2丁目	I 2b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	五十川高木	福岡県福岡市南区大字五十川高木町2丁目	I 4	1	0	1	0	0	0	0
筑前	御笠川南条坊1(5次)	福岡県太宰府市大字平野泉水	I 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	御笠川南条坊2(3次)	福岡県太宰府市大字太宰府	I 2b	1	1	0	0	0	0	0
筑前	御笠川南条坊2(3次)	福岡県太宰府市大字太宰府	I 5	1	0	1	0	0	0	0
筑前	御笠川南条坊3(6次)	福岡県太宰府市大字太宰府	Ⅱ 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	御笠川南条坊3(6次)	福岡県太宰府市大字太宰府	Ⅱ 3	1	0	0	0	0	0	1
筑前	御笠川南条坊4(1次)	福岡県太宰府市大字平野	I 5	2	0	0	0	0	0	2
筑前	御笠川南条坊4(2次)	福岡県太宰府市大字平野	I 2b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	御笠川南条坊4(2次)	福岡県太宰府市大字平野	I 5	2	0	0	0	0	0	2
筑前	御笠川南条坊4(2次)	福岡県太宰府市大字平野	Ⅱ 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	諸岡K区	福岡県福岡市博多区諸岡2-9-11	不明	1	0	0	0	0	0	1
筑前	真奈板	福岡県甘木市大字矢野竹	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	清末2次	福岡県福岡市早良区東入部	I 4	1	0	0	1	0	0	0
筑前	清末3次	福岡市早良区東入部	I 1c	2	0	2	0	0	0	0
筑前	席田青木	福岡県福岡市博多区青木1-314他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大原C1	福岡市西区今津3750-1外	I 2b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府史跡103次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	I 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	大宰府史跡109・111次	福岡県太宰府市大字観世音寺	I 2c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	大宰府史跡117次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	大宰府史跡119次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	I 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	大宰府史跡119次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府史跡119次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	Ⅱ 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	大宰府史跡121次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府史跡33次	福岡県太宰府市大字太宰府月見山	I 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	大宰府史跡45次	福岡県太宰府市大字観世音寺字今道	Ⅱ 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	大宰府史跡56次	福岡県太宰府市大字観世音寺字鼓石	Ⅱ 1a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府史跡62次	福岡県太宰府市大字太宰府字新町	不明	1	1	0	0	0	0	0
筑前	大宰府条坊127次	福岡県筑紫野市大字杉塚	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府条坊2	福岡県太宰府市大字観世音寺字露切	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府条坊3(19次)	福岡県太宰府市大字観世音寺	I 1a	3	0	3	0	0	0	0
筑前	大宰府条坊3(19次)	福岡県太宰府市大字観世音寺	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府条坊3(19次)	福岡県太宰府市大字観世音寺	I 5	1	0	1	0	0	0	0
筑前	大宰府条坊6(138次)	福岡県太宰府市五条1-2476-2	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	長峰	福岡県福岡市早良区東入部字飛熊714~3他	I 2b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	田村4(7次)	福岡県福岡市早良区大字田	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	砥上上林1	福岡県朝倉郡夜須町大字砥上字上林	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	藤崎3(9次)	福岡県福岡市早良区藤崎1丁目2-29	I 1b	2	0	0	0	0	0	2
筑前	藤崎3(9次)	福岡県福岡市早良区藤崎1丁目2-29	I 1b	1	0	0	0	0	0	1

中国産播鉢出土一覧表(2)
※荻野 『中世陶磁器データベース』

旧国	遺 跡 名	所 在 地	型式	合計	I Ⅲ	ⅣⅤ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	不明
筑前	藤崎3(9次)	福岡県福岡市早良区藤崎1丁目2-29	I 5	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多1(10次)	福岡県福岡市博多区冷泉町474-9	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多13(36次)	福岡県福岡市博多区祇園町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多13(36次)	福岡県福岡市博多区祇園町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多13(36次)	福岡県福岡市博多区祇園町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多14(39次)	福岡県福岡市博多区店屋町2・3・4他	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多14(39次)	福岡県福岡市博多区店屋町2・3・4他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多14(39次)	福岡県福岡市博多区店屋町2・3・4他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多14(39次)	福岡県福岡市博多区店屋町2・3・4他	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多14(39次)	福岡県福岡市博多区店屋町2・3・4他	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多15(40次)	福岡県福岡市博多区呉服町251他	I 2b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多16(37次)	福岡県福岡市博多区博多駅前1	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多16(37次)	福岡県福岡市博多区博多駅前1	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多16(37次)	福岡県福岡市博多区博多駅前1	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多18(43次)	福岡県福岡市博多区店屋町8,9	I 1c	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多18(43次)	福岡県福岡市博多区店屋町8,9	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 1c	3	0	0	0	0	0	3
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 2a	2	0	0	0	0	0	2
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 2a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 2b	2	0	0	0	0	0	2
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 3	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	I 5	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	Ⅱ1a	6	0	0	0	0	0	6
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	Ⅱ1b	3	0	0	0	0	0	3
筑前	博多2(4次)	福岡県福岡市博多区冷泉町7-1	Ⅱ4	2	0	0	0	0	0	2
筑前	博多20(45次)	福岡県福岡市博多区祇園町4-50	I 1b	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多20(45次)	福岡県福岡市博多区祇園町4-50	I 1b	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多20(45次)	福岡県福岡市博多区祇園町4-50	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多20(45次)	福岡県福岡市博多区祇園町4-50	I 1b	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多20(45次)	福岡県福岡市博多区祇園町4-50	I 3	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多20(45次)	福岡県福岡市博多区祇園町4-50	Ⅱ1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多21(50次)	福岡県福岡市博多区祇園町317,318	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多21(50次)	福岡県福岡市博多区祇園町317,318	Ⅱ1a	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多26(46次)	福岡県福岡市博多区古門戸町1	I 5	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多27(48次)	福岡県福岡市博多区御供所町40外	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多27(48次)	福岡県福岡市博多区御供所町40外	I 5	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多34(56次)	福岡県福岡市博多区店屋町4-1	I 1b	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多34(56次)	福岡県福岡市博多区店屋町4-1	I 2b	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多34(56次)	福岡県福岡市博多区店屋町4-1	I 3	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多36(59次)	福岡県福岡市博多区祇園町187-226	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多36(59次)	福岡県福岡市博多区祇園町187-226	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多37(65次)	福岡県福岡市博多区祇園町161-1	I 1c	1	0	1	0	0	0	0

中国産播鉢出土一覧表(3)

※荻野 『中世陶磁器データベース』

旧国	遺 跡 名	所 在 地	型式	合計	I Ⅲ	IV V	VI	VII	VIII	不明
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	I 1b	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	I 1b	2	0	2	0	0	0	0
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	I 1c	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多38(66次)	福岡県福岡市博多区御供所町129-1	II 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多41(70次)	福岡県福岡市博多区冷泉町388外	I 1a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多41(70次)	福岡県福岡市博多区冷泉町388外	II 3	3	0	3	0	0	0	0
筑前	博多45(77次)	福岡県福岡市博多区店屋町156	I 5	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多46(74次)	福岡県福岡市博多区上呉服町131-2	I 1a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多46(74次)	福岡県福岡市博多区上呉服町131-2	I 3	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 1d	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 2a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 2b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 2b	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 2d	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 3	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	I 5	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多48(62次)	福岡県福岡市博多区御供所224他	II 1a	2	0	2	0	0	0	0
筑前	博多5(25次)	福岡県福岡市博多区祇園町1-1	I 1a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多7(28次)	福岡県福岡市博多区祇園町1	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線1(1次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 3	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線2(2次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多駅築港線2(2次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多駅築港線2(2次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線2(2次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 1c	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線2(2次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 1c	1	0	0	0	1	0	0
筑前	博多駅築港線3(3次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 1c	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多駅築港線3(3次)	福岡県福岡市博多区上呉服町1	I 2b	1	0	0	1	0	0	0

中国産播鉢出土一覧表(4)
※荻野 『中世陶磁器データベース』

旧国	遺 跡 名		型式	合計	I Ⅲ	Ⅳ V	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	不明
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1b	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1c	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 1c	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 2a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 2a	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 2a	1	1	0	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	I 3	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多駅築港線4(4次)	福岡県福岡市博多区上呉服町	Ⅱ 1a	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多高速鉄道4(c)	福岡県福岡市博多区御供所町	I 1b	2	0	2	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道4(c)	福岡県福岡市博多区御供所町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道4(c)	福岡県福岡市博多区御供所町	I 2a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道4(c)	福岡県福岡市博多区御供所町	Ⅱ 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道5(a)	福岡県福岡市博多区御供所町東長寺前	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道5(a)	福岡県福岡市博多区御供所町東長寺前	Ⅱ 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道5(a)	福岡県福岡市博多区御供所町東長寺前	Ⅱ 4	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 2a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 2a	1	0	1	0	0	0	0
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	I 5	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道6(h)	福岡県福岡市博多区馬場新町	Ⅱ 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	博多高速鉄道7(d)	福岡県福岡市博多区綱場町,中呉服町	I 4	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道7(d)	福岡県福岡市博多区綱場町,中呉服町	Ⅱ 1a	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道7(d)	福岡県福岡市博多区綱場町,中呉服町	Ⅱ 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道7(d)	福岡県福岡市博多区綱場町,中呉服町	Ⅱ 2	1	0	0	0	0	0	1
筑前	博多高速鉄道7(e)	福岡県福岡市博多区御供所町	I 1c	1	0	1	0	0	0	0
筑前	箱崎3(5次)	福岡県福岡市東区箱崎1-27,25	I 1b	1	0	0	0	0	0	1
筑前	板付周辺(F7e)	福岡県福岡市博多区板付5丁目3-19	I 1b	1	0	0	1	0	0	0
筑前	板付周辺(F7e)	福岡県福岡市博多区板付5丁目3-19	I 1c	1	0	0	1	0	0	0
筑前	有田・小田部165次	福岡県福岡市早良区有田1-21-11	I 1c	1	0	0	0	0	0	1
筑前	有田・小田部32次	福岡県福岡市早良区有田1-29-9	I 1c	3	0	3	0	0	0	0
筑後	東光寺	福岡県久留米市山川町字東光寺口	I 2	1	0	1	0	0	0	0
筑後	東光寺	福岡県久留米市山川町字東光寺口	I 2	2	0	0	0	0	0	2
相模	千葉地	神奈川県鎌倉市御成町15-5	I 1c	1	0	0	1	0	0	0
合 計				206	11	97	21	11	0	66

※東光寺遺跡(筑後)の I 2は詳細不明。